

第1回 食に関する指導研修会

令和4年10月22日（土）に愛知県総合教育センター 相談部 特別支援教育相談研究室 研究指導主事 柴田朋宏先生をお招きし、「発達障害のある児童生徒の理解と支援～偏食の背景を障害特性から考える～」という演題で研修会を行いました。愛知県栄養教諭研究協議会175名の会員が参加し、発達障害の特性について理解を深めるとともに、それによって起こる偏食への具体的な対応を学ぶ、大変有意義な勉強会となりました。

1 発達障害の基礎的知識と食事面での困難について

はじめに、発達障害の特性から食に関してどのような困難があるのかを教えてくださいました。例えばASD（自閉症スペクトラム症）は、食べられるものの幅が狭い、新しいものに抵抗を見せるなどの不安が原因の困難、ADHD（注意欠如多動症）は、食事に集中できないなどの行動面での困難、DCD（発達性協調運動症）は、食事をこぼす、時間がかかるなどの運動機能が原因の困難が考えられます。また、これらの間に明確な境界線はなく、一人一人の特性を把握し、個に応じた指導と支援が大切であることを学びました。



2 偏食の背景と対応について

発達障害における偏食の基本的な向き合い方は、まず食べられない理由を考えることです。感覚過敏の影響なのか、不安やこだわりへの影響なのか、運動機能、または集中力の影響なのか、4つの偏食を起こす背景を理解すること。そしてスモールステップで取り組む、強制はしない、変化を少なくするなどの、基本的な対応方法について教えてくださいました。また、少しでもできたらほめることで、本人のやる気、達成感、自信につなげていくことが大切だということが分かりました。

3 学校における支援の実際

食に関する授業、給食指導などにおける偏食のある子どもへの支援の方法について、お話がありました。個別に支援が必要な子どもに対しては、その子どもの状況や心情を理解し、子どもと合意をした目標を設定し、スモールステップで取り組むこと。食に関する授業では、食べものの知識を広げ、食べることへの興味や意欲につなげること。日々の給食指導では、学級担任と連携をとりながら、栄養教諭が時々教室に入って、ほめて認めてあげることが、子どものやる気につながるとお話しくださいました。

《参加者の声》

学校での子どもたちの様子を思い浮かべながら聞いていると、障害の特性と偏食の関係性について、なるほどと思うことがとても多くありました。障害の特性はそれぞれの子どもで違うのですが、さまざまな具体的手だてを知っておくことは、学級担任が食に関する支援に悩んだり行き詰ったりしたときに、一緒に考え、支援していくことができると思いました。今日の講義をきっかけに、さまざまな特性を理解し、目の前の子どもたちに、効果的な支援ができるよう考えていきたいと思えます。